

2018年4月29日(日)

主 題:「互いに愛し合いなさい」

—主のみ力によって—

テキスト:ヘブル人への手紙13章1~3節

はじめに

- ・私たちの生活は、何を信じるかによって決まってきます。
つまらないものを信じればつまらない生活になり、素晴らしいものを信じれば素晴らしい生活になります。もしも「この世の中は金次第だ！」と本当に思っていれば、その人の生活はお金が中心の生活になってしまいます。
- ・皆さん。どうぞ誤解しないでください。お金は私たちの生活で必要です。
お金が不要と言っているのではありません。「この世は金次第だ！」と信じて、他が見えなくなってしまうことを指しているのです。世の中は、全てお金が解決してくれると信じて、お金、お金いつも思っていることです。
- ・そのため、そういう人の心には何の潤いもありません。すべてはお金という尺度で測られ、それでおしまいということになります。ですから、家族の間には心の交流はありません。お金がすべて、という毎日になってしまうからです。
- ・ですから、私たちは何を信じるかによって、私たちの生活が左右されることになります。
- ・信仰生活も同様です。私たちが何を信じるかに、すべてはかかっていると言ってよいでしょう。ですから、この書簡の著者は、1章から12章にかけて、信じる信仰の内容について述べました。そして、いよいよその信仰から出てくる生活について、勧めを述べることになりました。
- ・つまり、13章は著者の「まとめ」の部分となります。一言でいうなら、それは「互いに愛し合う」ことです。今日、私たちはこの大切なポイントから、主の御声を聞いていきたいと願います。 2点

大切なポイント

1. 互いに愛し合いなさい

13:1 兄弟愛をいつも持っていなさい。

1) 神の勧め

- ・著者は冒頭において、まず「互いに愛し合いなさい」と勧めています。
神を信じる私たちが互いに愛し合うことは、聖書全体が一貫して教えているところです。ある時、ユダヤ教の専門家がイエスに次のように尋ねました。マタイ福音書22章
22:36 「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」
22:37 そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』
22:38 これがたいせつな第一の戒めです。
- ・イエスはまた、弟子たちに次のように言われました。ヨハネ13章
13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。
13:35 もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子

であることを、すべての人が認めるのです。

- ・使徒パウロも、次のように語りました。ローマ人への手紙12章
12:10 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。
- ・ペテロもまた、次のように述べました。1ペテロの手紙1章
1:22 あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい。
- ・キリスト信仰から出てくる第一のことは、私たちが互いに愛しあうことです。これができるためには、何を信じるかが、しっかりと自分のものとなっていなければなりません(二心ではいけない)。それが本当にできれば、愛し合うことはできるはずです。

2) イエス・キリスト

- ・そこで著者はまず、神の御子であるイエスがなぜ人としてこの世にこられたかということを書きました。
2:10 神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。
- ・神は私たちを救うため、御子をこの世に送り、十字架上で死なせるほどの苦しみを経験させられました。つまり、御子の犠牲によって、私たちを救ってくださいました。そればかりか、私たちを死の恐怖から解放するため、人間となってくださいました。
2:14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、
2:15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。
- ・イエスは地上で歩まれた時、私たちと同じような経験をされました。神の子であるお方が、あらゆる点で私たちと同じ経験をされました。それは私たちの罪を贖うために十字架上で死んでくださったことです。今は天に帰られましたが、私たちを助けてくださいます。

3) 主の愛のムチ

- ・私たちの日々の生活では、様々な戦いがあります。少しぐらい苦しいことがあっても、神は私たちを見離しておられるわけではありません。著者は次のように述べました。
12:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。
つまり、主の愛のムチに他なりません。それは私たちを救い出し、神の御心になかった者となるためです。徹頭徹尾、私たちのためなのです。
- ・ですから、主の愛によって救われ、教会に加えられた私たちは「互いに愛し合う」ことができるようにしてくださいました。それは自力によって、愛するものではありません(不可能)。それは神によるのです。ですから、
- ・愛のムチを受ける時、それはイエスにあって「互いに愛し合う」ようにされていることを感謝することです。そこが始まりです。不平、不満、眩き、ではありません。愛のムチを受ける時、逆に感謝の心を持つことです。
- ・では、どうすればよいのでしょうか。
主の前に出ることです。主を賛美することです。主に祈ることです。そして

神のみ言葉を信頼し読むことです。これらのことを、真剣に取り組むならば、主は必ず私たちの心に働いてくださいます。

- ・それでは、著者はなぜ「互いに愛し合いなさい」と勧めているのでしょうか
それは、愛し合うことにおいて、神の栄光が現されるからです。愛は神の教会を一つにします。物事がうまくいっている時に、「互いに愛し合う」ことは容易なことです。しかしいったん、人間関係がこじれてしまうならば、大変難しくなります。
- ・無条件の愛を与えてくださったキリストの愛を仰がなければ、そして「あなたの愛で私を満たしてください」と祈らなければ、この大切な勧めを实践することはできません。著者は愛には具体性があることを教えています。
つまり、「愛は名詞ではなく動詞である」のです。

2. 愛には具体性がある

1) 他人をもてなすこと

13:2 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。

- ・旧約時代、神の民は「人をもてなす」ことにたけていました。

一例を挙げるならば、創世記 18 章にその霊を見ることができます。

18:1 主はマムレの樫の木の下で、アブラハムに現われた。彼は日の暑いころ、天幕の入口にすわっていた。

18:2 彼が目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。彼は、見るなり、彼らを迎えるために天幕の入口から走って行き、地にひれ伏して礼をした。

18:3 そして言った。「ご主人。お気に召すなら、どうか、あなたのしもべのところを素通りなさないでください。

18:4 少しばかりの水を持って来させますから、あなたがたの足を洗い、この木の下でお休みください。

18:5 私は少し食べ物を持ってまいります。それで元気を取り戻してください。それから、旅を続けられるように。せつかく、あなたがたのしもべのところをお通りになるのですから。」彼らは答えた。「あなたの言ったとおりにしてください。」

18:6 そこで、アブラハムは天幕のサラのところへ急いで戻って、言った。「早く、三セアの上等の小麦粉をこねて、パン菓子を作っておくれ。」

18:7 そしてアブラハムは牛のところへ走って行き、柔らかくて、おいしそうな子牛を取り、若い者に渡した。若い者は手早くそれを料理した。

18:8 それからアブラハムは、凝乳と牛乳と、それに、料理した小牛を持って来て、彼らの前に供えた。彼は、木の下で彼らに給仕をしていた。こうして彼らは食べた。

18:16 その人たちは、そこを立って、ソドムを見おろすほうへ上って行った。アブラハムも彼らを見送るために、彼らといっしょに歩いていた。

18:17 主はこう考えられた。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」

- ・彼は全く知らない人たちを、心からもてなしました。その内の二人は天使であり、もう一人は主ご自身でした。人をもてなすということは、愛の一つの具体的な例です。
- ・このストーリーから教えられることは：
 - ① アブラハムは3人の旅人との「出会い」を大切にした。
 - ② アブラハムは妻サラと、旅人に最上のもてなしをした。

- ・人をもてなすことは、必ずしも人を自分の家に泊めてあげることではありません。自分のことだけを考えるのではなく、他の人の必要に答えてあげることです。他の人が困っているのを見て、見て見ないふりをするのでもありません。新訳聖書に置いて、イエスは「良きサマリア人」のたとえ話で、その奥義を教えられました。
- ・もてなしの根本には、思いやりがあります。思いやりは、愛と深く関わっています。愛のあるところ、そこには当然思いやりもあるはずです。

2) 苦しむ人を思いやること

13:3 牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、また、自分も肉体を持っているのですから、苦しめられている人々を思いやりなさい。

- ・約2000年前の当時(ローマ時代)、信仰のために投獄された聖徒たちがいました。彼らへの思いやりは大切なことです。「苦しめられている人々を思いやりなさい」と勧めています。
- ・日本社会では最近、幼児虐待が大きな社会問題となっています。多くの場合、故意に大人が子どもを虐待し、体罰を加えたり、食事を与えなかったりすることがあります。大人は自分の気分がむしゃくしゃしている時、その気持ちをどこにぶつけていいのかわからず、弱者にぶつけてしまうことがあります。
- ・大人はそれで気分が晴れるかも知れませんが、子どもの心は深く傷ついていることを知らなければなりません。虐げられるのは、いつも弱者です。幼い子どもだけではありません。成人した大人でも、弱い立場にある人は、強い人から虐げられます。今日本社会では、それをDVと呼び大問題となっています。職場、学校、家庭などで、DV問題は決して小さなことではなく深刻な問題です。
- ・一方、世界に目を向けるならば、信仰のために迫害を受けているキリスト教会とクリスチャンは多数います。かつては旧ソ連、旧東欧諸国でした。私は今から約45年以上前、これらに迫害下の国々に入りキリスト宣教の働きをさせていただいた一人です。(今日はそれについて語る時間はありませんので、私の著書をお読みいただければ幸いです。)
- ・しかし、迫害で苦しむ人々は今の時代も同じようにいます。
 - {例話}
 - ・国際的宣教団体「Open Doors」は、2018年の世界で迫害度の高い国々50か国を挙げました。その統計によれば、世界50か国において、約48億人が迫害下に置かれています。その内約6億人がクリスチャンです。
 - ・迫害度の順位の上位10か国は、まずナンバーワンとして北朝鮮があげられます。次にアフガニスタン、ソマリア、スーダン、パキスタン、エリトリア、リビア、イラク、イエーメン、イランの順です。そしてさらに11位から、50位まで挙げられています。
- ・皆さん。昔も今も、時代は移り代わっても、信仰のために迫害を受ける人々があります。著者は、彼らを忘れていけない、と言いました。むしろ「牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、また、自分も肉体を持っているのですから、苦しめられている人々を思いやりなさい。」(13:3)と勧めました。
- ・著者はもう一点大切な勧めをしました。

3) 信仰をもって生きること

- ・イエスは信仰を持って生きる人というのは、愛に生きる人であると言われました。 マタイ福音書 25章

25:31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。

25:32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、

25:33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。

25:34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』

25:35 あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、

25:36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』

25:37 すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。』

25:38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。』

25:39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』

25:40 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』

- ・ここで大切なことを教えられます。苦しむ人たちを思いやるということは、単にそばにいてあげること、悩みと苦しみを聞いてあげることではないことです。ましてや「一緒になって、恨み、つらみを言って、傷口をなめ合うこと」でもありません。
- ・一緒に悩み、苦しみながら、そこで私たちのために苦しんでくださったイエス・キリストを、見上げることなのです。その時、イエスになんでも話すことができます。そして、真の安息を持つことができます。「互いに愛し合う」とは、そういうことです。
- ・私たちはその愛を、神の御子イエスからいただいた者です。イエスの愛を持って「互いに愛し合う」時、教会は真の安息の場所となるのです。

- ・では、どうすれば「愛し合うこと」ができるのでしょうか・・・？

⇒私たちが愛してくださったお方（イエス・キリスト）を仰ぐこと

貧しい人を助け、病んでいた人を助け、ユダヤ教律法を破ったため迫害を受けた人を助けられた、イエス・キリストを仰ぐことです。私の内には、愛するという力があまりに不足するからです。

- ・私たちの力は天に昇られたイエス・キリストから来ます。

詩篇はこのように賛美しています。

121:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。

121:2 私の助けは、天地を造られた主から来る。

121:3 主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。

- ・では、どうすれば主にお出会いすることが可能でしょうか？

⇒毎日、主の前で心を静めること、主との交わりを重視すること

(devotion)

- ・イエス・キリストを知ることは、力であり、励ましであり、喜びです。キリスト者とは、その力を、励ましを、そして喜びを受ける人です。それは決して自力ではありません。主が恵みとして与えてくださる贈物です。その人こそ、「愛し合う」ことができるのです。

ま と め

主 題:「互いに愛し合いなさい」

—主のみ力によって—

- ・著者はこの書簡の「まとめ」として、まず「互いに愛し合いなさい」と勧めました。強制でも命令でもありません。信仰は決してそのような者ではなく、「勧め」です。「互いに愛し合う」ところに、神の栄光が現され、キリストの教会は一つとなるからです。
- ・そして「互いに愛し合う」ことは、次のような具体性があることを教えられました。

- 1 他人をもてなすこと
- 2 苦しむ人を思いやること
- 3 信仰をもって生きること

* God bless you!